

登校回避感情のある子どもの人間関係の特徴 —小4生から高3生の学校段階別検討—

小川 淳子¹、岡部 悟志¹、木村 治生^{1,2}
(1 ベネッセ教育総合研究所、2 帝京大学)

ベネッセ教育総合研究所

(1) 背景と目的

なぜ「登校回避感情」と「人間関係」に着目するのか

- 不登校児童生徒は年々増加。不登校状態への支援に加え、不登校の前段階でのつまづきを把握し、予防的に関わることが課題。
- 登校回避感情は、欠席・遅刻・早退などの行動や不登校の有無にかかわらず、生徒が「学校に行きたくない」と思う気持ち(小幡・堀井, 2020)をとらえる概念であり、不登校の潜在群を把握する手がかりとなる。
- 先行研究では学校ストレス、ソーシャル・サポート、生活習慣、健康状態などと関連することが示されてきた(三浦, 2006; 有賀, 2013; 穂本ら, 2017)。
- 人間関係面では、家族・友人・教員からのサポート、友人関係の変化やトラブル等が登校回避感情と関連することが指摘されている(木原ら, 2004; 有賀, 2013; 小幡・堀井, 2020)。

先行研究の課題

課題① 小学生対象の研究もみられるが、中学生・高校生に比べ蓄積は相対的に限られる。小学生から高校生までを同一枠組みで比較した知見も少ない。

課題② 教員・友人・家族などの支援源を扱う研究はあるが、「さからう」「けんかする」「悩みを話す」「感謝する」といった具体的な関係行動を、教員・友人・親の3領域で並べた比較は十分でない。

課題③ 先行研究では平均的傾向に着目した分析が多く、強い登校回避感情を示す子ども人間関係に関する回答がどのように分布するのかは、十分に検討されていない。

本研究の目的

- 小4～高3の本人回答を用い、強い登校回避感情のある子どもの人間関係の特徴を学校段階別に明らかにする。
- 教員・友人・親との具体的関係行動について、差がみられる側面と、その差の表れ方を検討する。
- 先行研究が相対的に少ない小4～6生にも着目し、中学生・高校生との比較から小学校高学年段階の特徴を検討する。

(2) 方法

調査概要

調査名	東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもとの生活と学びに関する親子調査2024」
調査時期	2024年7～9月
調査方法	調査依頼は郵送、回答はWebで実施
調査対象	全国の小学1年生から高校3年生の子どもとその保護者 ※小学1～3年生は保護者が回答

※倫理的配慮: 調査冒頭画面で研究目的、回答の任意性、個人情報の取り扱い等を説明し、同意を得た上で実施。調査は東京大学の倫理審査委員会の承認を得た。

本研究の対象

- 対象: 子ども本人の回答が得られた小学4年生から高校3年生
- 有効回答: 小4～6生 2,906名 / 中学生 2,835名 / 高校生 1,972名

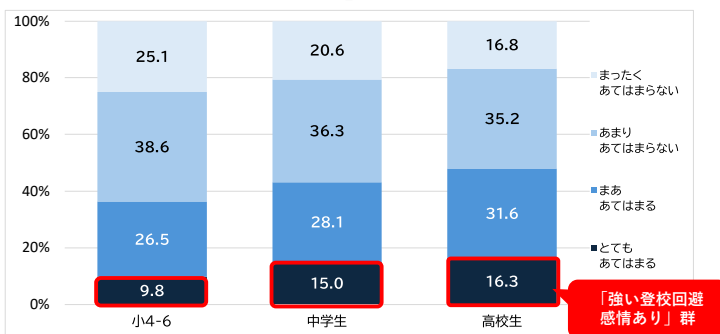
分析に使用した変数

①登校回避感情

- 「学校に行きたくないことがある」(4件法)を使用。
- 「とてもあてはまる」=強い登校回避感情あり群(強いあり群)。
- 「まああてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」=その他群。
- 度数分布(図1)と切点変更の感度分析により、2値化の合理性を確認。

※注: 抄録では「登校回避感情あり群/なし群」と表記。本ポスターではより実際の分類に即し、「強いあり群/その他群」と表記。分類基準は変更していない。

図1: 「学校に行きたくないことがある」設問の回答分布



②人間関係指標(各4件法)

- 学校の先生: さからう(反抗する) / 悩みを話す / 感謝する
- 友だち: けんかする / 悩みを話す / 感謝する
- 親: さからう(反抗する) / 悩みを話す / 感謝する

分析

- 学校段階別に分析(小4～6生 / 中学生 / 高校生)。
- 強いあり群とその他群で、各人間関係指標の回答分布を比較。クロス集計 + χ^2 検定により有意差を確認。
- 効果量としてCramerのVを算出。
- 分析にはSPSS Statistics ver.29を使用。

(3) 結果

登校回避感情と人間関係指標の関連

表1: 教員・友人・親9項目のCramerのV

領域	項目	小4～6	中学生	高校生
教員	学校の先生にさからう(反抗する)	.160***	.116***	.127***
教員	学校の先生に悩みを話す	.072**	.132***	.078**
教員	学校の先生に感謝する	.138***	.175***	.149***
友人	友だちとけんかする	.134***	.107***	.103***
友人	友だちに悩みを話す	.086***	.089***	.106***
友人	友だちに感謝する	.111***	.161***	.123***
親	親にさからう(反抗する)	.076**	.117***	.107***
親	親に悩みを話す	.116***	.110***	.105***
親	親に感謝する	.055*	.076**	.131***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$. 数値はCramerのV.

CramerのVは方向を示さないため、方向は図2・図3で確認した。

図2: 方向が一貫した項目

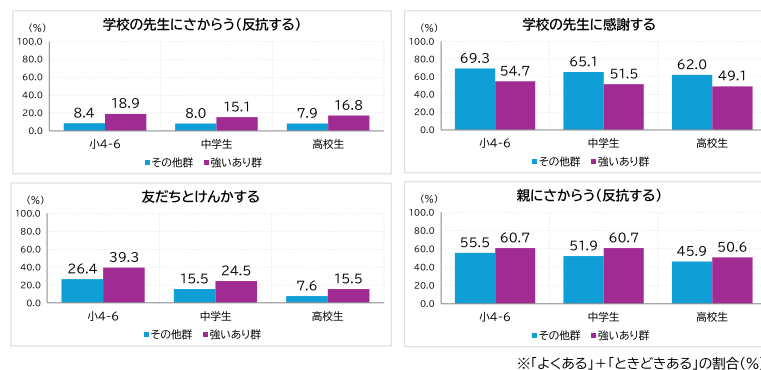
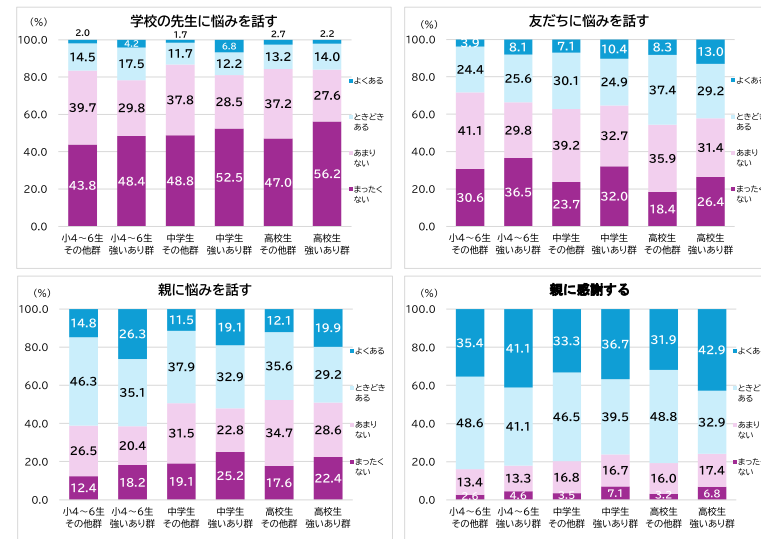


図3: 単純な高低では説明しにくい項目



(4) 考察

・強いあり群は小4～6生9.8%、中学生15.0%、高校生16.3%。本データでは学校段階が上がるほど割合が高い(図1)。

・一貫した差: 強いあり群では、学校の先生にさからう、友だちとけんかする、親にさからう割合が高く、学校の先生に感謝する割合は低い(図2)。

・単純な高低では説明しにくい分布の偏り: 悩みを話す、親に感謝する項目でみられる。悩みをよく話す子どもと、まったく話さない子どもが併存する可能性あり(図3)。

・小4～6生: 主要項目は中高生と概ね同方向。小学校高学年でも、強い登校回避感情と人間関係上の特徴が関連している可能性あり。

・示唆: 強い登校回避感情のある子どもの人間関係は、単に「関係が悪い」と捉えるのではなく、反発、相談や感謝を示す子どもと示さない子どもが併存するものとして理解する必要がある。

・留意点: CramerのVはいずれも小さく、登校回避感情は人間関係のみで説明されない。また本研究は横断的群間比較であり、因果解釈には慎重が必要である。